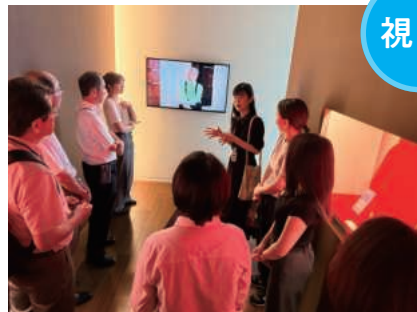




ミュージアムマネージャー市川美幸氏の案内で「フェリシモ チョコレート ミュージアム」を見学。館内にはKOBEミュージアムリンクの連携企画の一つ、市内のミュージアムを巡って楽しむ「重ね捺しスタンプラリー」も設置

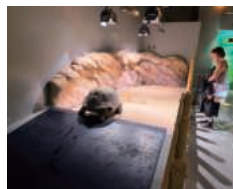


視察

ゲスト
事例



ゲストの「岡山県立美術館」副管理者・福富幸氏(左)は、岡山県博物館協議会の活動や「学芸員ラップバトル」「ゲームさんぽ×備前焼」など若年層の来館促進企画を紹介。「華鶴(はなとり)大塚美術館」主任学芸員・三宅利枝氏(右)は、井原市内の文化施設連携の現状と、各館の温度差を埋めながら進める取り組みを共有



希望者はフェリシモ本社の隣にある「神戸ポートミュージアム」内の劇場型アクアリウム「AQUARIUM × ART atoa」も見学。2021年にオープンした同施設は10月で5周年。今夏には生きものと触れ合える「ELEMENTS 精霊の森」をリニューアルするなど、ますます人気上昇中!



視察

第88回会議は8月27日、フェリシモ本社「Stage Fellowshipホール」で開催され、出席者は「フェリシモチョコレートミュージアム」を視察。KMLのPR大使である鳥瞰図絵師青山大介氏とコラボレーションしたプログラムは、神戸とチョコレートとのトリビアを紐解くデジタルアート。また世界のチョコレートパッケージ約1万9千点の展示コーナーでは、天井まで届く棚の下から鑑賞できる工夫に「面白い」と声が上がっていた。

会議では、2026年度事業であるミュージアムカード制作の進捗を共有。参画館とパートナー館を合わせて72枚を制作する案が提示され、「代表作品」「マニアックな収蔵品」などテーマ別に複数枚を集めると1つの絵が完成する、集めたいくなる仕掛けを検討中であると報告。年内制作、来年1月配布をめざす。また文化庁「博物館機能強化推進事業(専門的人材派遣)」への応募、PR大使の選抜方針などが報告され、神戸市立小磯記念美術館の過去の事例や、神戸観光局によるガイドサービスの需要増加など、各館の知見を共有する場となった。

ミュージアムの魅力をLINKする。 神戸にふくらむ、新しい楽しさ。

連携



神戸の美術館・博物館が連携する「KOBEミュージアムリンク」。視察や会議、懇親会での交流から、巡りたくなる楽しさがふくらんでいく。各館の魅力を面として広げる、その取り組みを紹介します。



KOBE
ミュージアムリンク
公式サイト



個館では実現が難しい企画を連携によって形にする…。そんな想いから2019年に発足した「KOBEミュージアムリンク(以下KML)」。神戸市内の美術館・博物館22館が参画し、設立母体も規模も目的も異なる館同士が自主的に連携する、全国でも例の少ない文化ネットワークとなっている。

厳格な参画条件を設けず、行政や大学、交通事業者、旅行会社、メディアなどもパートナーとして受け入れる、開かれた仕組みが特徴で、各館の来館促進はもちろん、神戸の文化を点ではなく、面として発信することをめざす。

呼びかけ発起人であり代表を務める「KOBEとんぼ玉ミュージアム」館長の宮本恭庸氏は、「個別の館だけでは得にくい接点や企画を生み出せることが連携の価値」と語る。月1回の会議に加え、オンライン会議やSNS勉強会も並行して行い、スタンプラリーや謎解きゲーム、オリジナルリンクの開発販売、学生との連携企画など、多様な魅力づくりを実施。来館者が実際に館へ足を運び、感動し、その体験を発信したくなる仕掛けづくりに取り組んでいる。



フェリスモ社屋内の「f winery(エフワイナリー)」で懇親会を開催。「人との出会いを大切にユニークなワインづくりを目指す都市型ワイナリー」で、当日はこの会のために特別に用意された軽食をビュッフェ形式で。細部までフェリスモらしいおもてなしが添えられた。※メニューや提供方法などは通常のサービスとは異なります

会議後は、フェリスモ社屋内のワイン醸造所「f winery」へ移動し、懇親会が行われた。飲みやすさや独創性を重視して作られたワインと軽食を片手に、にぎやかに情報交換が続く。個人負担での参加が大半なうえ、なかには「懇親会から参加の人もいる」ほど盛況で、自館の悩み相談やプライベートな秘話まで飛び交う、温かな場となった。

宮本氏は「活動を続けていく仕組みが大事。だから親睦会も重要ですよ」と笑う。過去に中央区の館だけでネットワークを作ったものの立ち消えとなった経験を踏まえ、今回は関わる人々を幅広く受け入れるゆるやかなネットワークとして位置付けているそう。参加者同士が自然に交流し、楽しく意見を交わせる場を細やかに支える。そんな姿勢が、このネットワークの雰囲気をつくっている。

文化を軸にネットワークが広がる。単なる美術館・博物館の連携ではなく、人と人が信頼でつながる「神戸の文化インフラ」として機能し始めている。文化を街の循環にする仕組みづくりによって、新しい来神者が生まれ、街の文化循環が育っていく。そんな未来への期待が高まる時間となった。